

原小だより



横浜市立原小学校

平成30年 6月29日

7月号

ほめること しかること

副校長 大嶽 賢司

梅雨に入り、はっきりしない天気の日が増えてきましたが、学校敷地内の紫陽花はこの時期を逃してなるものかと言わんばかりに、美しい花を咲かせています。また、晴天時の空の鮮やかな深い青色は、夏の到来が近いことを予感させてくれます。

ところで、私たちは、「晴天」を「天気が良い」、「雨天」を「天気が悪い」ということがありますが、植物にとっての晴天や雨天は、良い・悪いという観点ではなく、どちらもともに自らの生長になくてはならない大事なものです。雨ばかり降っては、植物は根が腐ってしまい、日照不足で育ちませんし、晴れの日ばかりでは水分が不足して枯れてしまいます。どちらもちょうどよいバランスで繰り返されることで、根や茎は太くなり、幹や枝は大きくなり、葉は勢いよく生い茂るのです。植物の生長には晴天と雨天のように真逆のものが必要なのです。

一方、動物にとっての真逆なものといえば、「快感」と「苦痛」といえます。多くの動物は、本能的に快感を求め、苦痛を避けるようになっているそうです。そして、人間はというと、動物である以上、同じような傾向にあるようです。もちろん、心身の成長途上にある子どもたちも同様です。しかし、快感を求め、苦痛を避けるだけでは健全な成長にはつながらないことは、皆さんもご存じのことでしょう。子どもの心身の成長には、保護者や地域の方々をはじめ、我々教職員も含めて大変多くの大人が関わることとなりますが、子どもの健全な成長を促すには、我々大人の大事な、そして、効果的な関わり方があるのです。

それは、先ほど植物の生長には真逆のものが必要であると述べたように、子どもたちの心身の成長にも真逆のものが必要であるということです。そして、子どもたちにとって真逆のもの、つまり「快感」と「苦痛」にあたるのが、「ほめること」と「しかること」なのです。良い行いに対して「ほめる」ことで子どもを良い気持ちにさせ、もっと良い行いができるように促すことは大事です。しかし、ほめるばかりでは甘えやわがママが出て、良い心は育ちませんし、ほめられることに慣れすぎると、ほめられないと不満に思ったり、他人の評価ばかり気にしたりする子になってしまいます。また、悪い行いに対して「しかる」ことで子どもに辛い思いをさせ、再び悪い行いをしないように諭すことも大事ですが、しかるばかりでは気持ちがすさんだりいじけたりして、良い心は育ちませんし、何に対しても自信がもてない子どもに育つ危険性もあるのです。

子どもたちは、1日に何回かほめられたりしかられたりする機会があります。そのバランスを子どもの育成に関わる人々がちょうどよくとることで、子どもたちの心身の成長を促していくことができます。学校と家庭、地域が協力し合い、より多くの眼で子どもたちの成長を見守っていきたいと思います。

新年度がスタートして3か月が経過し、子どもたちは新しい環境にかなり慣れてきました。その新しい環境とは、学級編成・児童の転出入・教職員の異動などでもたらされ、新しい人との出会いから始まったものです。人と人との出会いは、いくつもの偶然が重なり合って生まれます。その偶然によって出会った人々が集団を形成し、仲間となり、共同体として成長していく場所が学校であり学級です。偶然によって引き合わされた人々ですから、中には波長が合わない人や意見が異なる人もいるでしょう。でも、誰もが多くの偶然に導かれて出会った、かけがえのない人です。ぜひ、この新しい出会いに感謝して、互いに心を通わせてほしいと思います。我々教職員は、一丸となってその子どもたちを支援し、出会いに感謝できるよう全力を尽くす所存です。保護者の皆様、地域の皆様もぜひ子どもたちの応援をしていただけると幸いです。

自己紹介が遅くなりましたが、私は、この4月に同じ瀬谷区の二つ橋小学校からの異動で本校に赴任しました副校長の大嶽賢司（おおたけけんじ）と申します。私も異動という偶然によってこの原小学校で新しい出会いを経験しています。この出会いに感謝しながら、保護者、地域の皆様、そして、子どもたちから信頼される副校長であるために精進する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



経験を成長の糧に

校長 桃井 陽子

今年も暑い夏でした。記録を塗り替える猛暑日は何日も続き、熱中症の被害も数多く聞かれました。自分が子どもだった頃、夜は蚊帳をつつて、もちろんエアコンなんてなく、家族で寝たものですが、その頃の状況とは今、明らかに違い、これから一体、地球はどうなっていくのかしら・・・と、毎年のように思います。

夏休みが明け、子どもたちが学校に戻り、教室が再びエネルギーにあふれました。教室を巡ると、一人ひとりの子どもの様子を確かめながら朝の会が丁寧に進められていたり、夏休みの課題を集めていたりしました。また早速、漢字や算数のテストをやっている教室もたくさんあり、子どもたちは、いっぺんに学校生活モードに引き戻されるなど、不謹慎にも少々笑いを含んで回りました。

夏休み中の7月31日(火)には、本校を会場として、今年も瀬谷区小学校水泳記録会が行われました。三ツ境小・阿久和小・二つ橋小と原小の4校が集まり、その日も大変暑い日でしたが、練習の成果を発揮するよい機会となりました。どの子も泳ぐ前は緊張した面持ちでしたが、それぞれ、自分の記録に、自分自身に挑戦して泳ぎ、一杯泳ぎ切った後の清々しい顔がとても印象に残りました。そして、仲間がいる自分の場所に戻る時の顔、その友達を迎える仲間の表情に、優しさや温かさを感じ、そのことも自分ががんばれるパワーになるのだと思いました。大切にしたい仲間の一風景です。その中で、50M自由形に生明史帆さん(6年)、50M背泳ぎに相澤柚香さん(5年)、200Mリレーに相澤柚香さん(5年)、中川西優杏さん(6年)、丸山明莉さん(6年)、生明史帆さん(6年)が瀬谷区の代表に選ばれ、横浜国際プールで開かれた市小学校水泳大会に出場し、もてる力を存分に発揮してすることができました。今年の記録会ですばらしい!と感心、感動させられたのが、6年の佐古知優さんと北田優斗さんを中心とする応援でした。「いけいけ原小!」「おせおせ原小!」など、応援の仕方を書いたスケッチブックを前もって用意し、それを示しながら誰よりも声を出し、みんなも声を合わせ、大応援団になっていたことです。その大応援の中、一人ひとりが泳ぎ切ることができたのです。

学校が始まって8月28日(火)は、瀬谷区開催「横浜子ども会議」が瀬谷区役所で行われました。平成25年度の「横浜子ども会議」において、いじめを許さない社会をつくるために大切なこととして、アピール文「想～相手と心から向き合おう～」が採択され、今年度で6回目となります。原小学校からは増田千遥さん(6年)が代表として参加しました。平成30年度は「居心地」に着目し、「だれにとっても居心地のよい」学校づくりに向けた取組は、結果として「いじめ」に限らず様々な問題の未然防止につながると考え、子どもたちが主体的にどのような取り組みができるか、各中学校ブロックごとに発表しました。増田さんは、原中ブロックで話し合ったことを、明確に伝えることができました。増田さんにとって、この「横浜子ども会議」に参加したことは、貴重な経験になりました。今後は各中学校ブロックの取り組みを参考に、原小学校では、これからどんなことに取り組むことができそうか、各学校で報告することになっています。常日頃、私は子ども一人ひとりが大切にされ、一人ひとりに居場所がある学校にしたいと考えているので、増田さんの報告を楽しみにするとともに、その報告を受けて、原小学校の子どもたちが、具体的な取り組みを話し合い、実践していくことを大いに期待しているところです。

子どもたちは様々な体験や経験を通して成長していきます。そして今の自分を見つめ直すことにつながり、その子自身や、周りにもよい影響を与え、さらなる成長の活力、糧となると考えます。前期後半の学校生活が始まりました。地域の皆様、保護者の皆様、引き続き、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

原小だより



横浜市立原小学校

平成30年9月28日

10月号

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/hara/>

子どもを正しく導くということ

副校長 大嶽 賢司

今年の夏から初秋にかけて、猛暑で観測史上最高気温を更新する地域があったかと思えば、台風等によって記録的短時間大雨情報が発表される地域もあり、また、北海道では、北海道の観測史上初めて震度7を記録する北海道胆振東部地震が発生するなど、改めて自然の大きさと怖さを実感させられました。いまだに各地に災害の爪痕が残る日本列島ですが、夏休みが明けてから1か月が経過し、気が付くともう来週から10月に入ります。何をするにもよい季節である秋本番がもうそこまで来ています。

秋といえば、日本には秋の風物を表すものとして「秋の七草」があります。「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、これぞ七草」と五七五七七調で覚える「春の七草」は有名ですが、それに対して秋の七草は影が薄く、すべて覚えている方はそう多くはないと思います。そもそも春の七草というのは、厄除け・長寿などを祈念するためにいただく七草粥に入れる7種類の植物のことで、秋の七草は万葉集の中で山上憶良が詠んだ歌が起源とされ、食するのではなく見て楽しむ（または薬草として使う）植物です。無病息災を願う春の七草、秋の風情を楽しむ秋の七草。日本には、このように先人たちの知恵が詰まった文化や伝統などが数多くあります。我々は、そんな先人たちの築いた文化や伝統をもとにしながら、そこに新しい技術を融合させて、進歩し続けています。よいものを残しつつ、新しいものも取り入れていく。それが社会の発展につながっているのです。

そして、新しい技術を開発し、将来の社会を担うのは、ほかならぬ現在の子どもたちです。子どもたちの知恵や力が未来を切り拓いていくのです。しかし、私たちは、文化や伝統に限らず、あらゆる事柄に対してその意味を調べたり、理解したりすることなく、「これまで行っていたから。」「それが当たり前だから。」などと何の疑問をもたず、意味を追求することもなく過ごすことが少なくありません。その結果、思いもよらない失敗や誤解を招くことがあります。

そこで、将来の社会を担う子どもたちには、ぜひ、「なぜ?」「どうして?」と疑問を追求する態度や姿勢を身に付け、物事の意味や内容を十分に理解してほしいのです。疑問を追求し、理解し、納得する態度が新しい技術を生み、それが社会の発展につながっていくからです。

「どうして赤信号では、道路を渡ってはいけないの?」「どうして電車の中では騒いではいけないの?」「どうして友達をいじめてはいけないの?」などという問いに対して、「それをすると、怒られるから。」と答える子どもがいるという、もはや笑い話とはいえない話があります。ルールを守り、マナーをわきまなければならないのは、それを犯すと危険だったり、周囲に迷惑をかけることになったり、他人の権利を保障しなければならなかったりするからであるという、本来の意味の理解が不十分であると同時に、物事の現象や結果、自分の利害や損得にだけ目を向けるという価値観をもつ子どもを揶揄した話ですが、実は、その子どもを育てているのは私たち大人であることを忘れてはなりません。子どもたちの健全な育成には、大人が正しく導いていくことが必要かつ重要であるといえるのです。

私がまだ教職員としての経験の浅い頃、ある教育関係の本に、「子どもから質問され続けると面倒になって、つい『後でね。』などと答えていませんか? 子どもの興味や関心を高めるためには、きちんと答えることが大切です。」という話が載っていました。思い当たる節がある私にとって、とても耳の痛い話でした。そして、子どもを指導する上で、「何気なく発した言葉が子どもの健全な育成に悪影響を及ぼしていることがあるならば、それを改善し、しっかり子どもと向き合えないといけない。」と考え直させられたことを、今でも覚えています。

学校は、10月5日に前期の終業式を迎え、9日から後期に入ります。これまで半年間の学校生活を振り返り、それを受けて新たに後期の目標を立ててリスタートすることになります。後期も子どもたちが充実した学校生活を送れるよう、そして、子どもを正しく導いていけるよう、私たち教職員一同、一丸となって子どもたちの健全な育成に最大限の力を注いでまいります。引き続き変わらぬご支援、ご理解をよろしくお願いいたします。

(最後に、余談ですが、私は、秋の七草も五七五七七調で「ハギ、キキョウ、クズ、オミナエシ、フジバカマ、オバナ、ナデシコ、秋の七草」と覚えています。)

原小だより



横浜市立原小学校

平成30年10月30日

11月号

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/hara/>

「創立75周年」

伝統を紡ぐということ・・・

校長 桃井 陽子

「幸せよ育て！創立75周年記念 クローバー大作戦」と銘打って中庭をクローバーでいっぱいにとしようと、9月25日に蒔いたクローバーの種。蒔いた直後の雨や台風を心配したのですが、発芽して一安心しました。黄色っぽい頼りなげな芽が日を追うごとに色濃くなり、今、一面の柔らかな緑一色。よく見ると、小さいながらも、一つ一つがちゃんと三つ葉のクローバーになっていて、素直に感動です。子どもたちが小さな手で、やさしく触りながら「ふわふわだねえ。」「きれい！」「気持ちいい！」「かわいい。」「四つ葉あるかな？」等々、表情豊かに感想を伝えてくれます。しっかり根付いて四つ葉のクローバーを探す子どもや、花の季節に花冠をつくる子どもの姿を思い浮かべると、それだけで幸せな気分になります。また踏まれても踏まれても雑草のごとく、たくましく育ってほしいとも願っています。

75年前、とても厳しい時代に、この場所に子どもたちが元気に学べる学校を創ってあげたい、という地域の方々の願いとかけがえのないたくさんのご支援のおかげで、10月19日、原国民学校として誕生した原小学校。食糧不足のその時代、広い校地にかぼちゃなどを植え、市内の国民学校に配ったことから『かぼちゃの学校』と親しみを込めて呼ばれるようになったと聞きます。人を思いやる心、やさしさ、協力し合う心を、子どもたちは、身近な大人から学んできました。1万人を優に超える子どもたちが、繰り返し繰り返し原小学校を学び舎とし、巣立っていきました。

伝統を紡ぐということは、どういうことなのでしょう。その時その時の社会の様子を反映し、様々な要素を織り交ぜながら時代の姿を創りだしていく、その繰り返しの中で、この地をふるさととし、我が母校、原小学校という愛着、愛校心をもって思いが貫かれていること、思いをつなぐこと、この営みの中に伝統が紡がれていくのでしょうか。今も原小学校にかかわる何と多くの人たちに支えられて、日々の学校教育の営みがあるのかと、しみじみと実感させられます。原小学校は、本当に温かい、地域とともにある学校です。

10月15日は75周年をお祝いする創立記念式でした。今年度は、本校卒業生の石井久美さんにお話をお願いしました。石井さんは原園芸というお花屋さんで、入学式や卒業式のお花、PTAの講習会等で、日頃からお世話になっています。石井さんが子どもの前に登場するところから「石井久美劇場」。すばらしいパフォーマンスで一瞬にして子どもの心を捉えてお話が始まりました。お花屋さんだけにお花を話題にしながら「心と心のつながり」をテーマに、お話しになりました。お花のもつ人間に与える不思議な元気パワー。物言わぬお花を育てるには、お花を思う思いやりの心。だからこそ、お花は美しい花を咲かせ、私たちにきれいと感じる心をプレゼントしてくれる。人はいつも誰かに支えられて生きている。だからこそ、思いやりの心が大切。思いやりの心からありがたいの心、感謝の心が生まれる。お話の最後は全員で感謝フラワーを作ろうという提案でした。今、全員で作った感謝フラワーが16個のプランターに咲いています。1000本の感謝フラワーは圧巻です。

午後は、横浜隼人高校の吹奏楽部によるすばらしい演奏会で、創立75周年記念のお祝いに大きな花を咲かせることができました。

子どもたちは、次代を担い未来を生きる宝物です。子どもたちには、このふるさとを愛し、夢や目標をもって、心豊かにたくましく成長してほしいと願っています。私は、子どもたちの「夢のお手伝い」をしていくこと、そしてつながりの一つの拠点として、原小学校の伝統を紡ぎながら、これからも地域の発展に寄与していくことを念頭に置きたいと思いました。教職員一同、さらなる発展に向け努力して参ります。今後とも、より一層のご指導、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

原小学校にお立ち寄りの際は、ぜひ、クローバーで緑一面の中庭をご覧ください。



あなたが、大切です。

校長 桃井 陽子

ある朝の様子です。登校してきた2年生が、自分たちが育てているブロッコリーとカリフラワーの植木鉢が並ぶところに一目散に行き、自分の植木鉢を見ていました。私もついて行ってみると、葉っぱの中心に小さなカリフラワーを見つけました。「あっ、カリフラワーができてるね。」「うん！」元気いっぱいの声が返ってきました。私が「ブロッコリーとカリフラワーって似てるねえ。どうやって区別するのかなあ？」と質問すると、子どもたちは、しばらく見比べていましたが、ある子が「葉っぱの色がブロッコリーは濃くてカリフラワーは薄いよ。」と。なるほど、カリフラワーが葉っぱの中心にでき始めているの是一目瞭然ですが、そうでないものをよく見ると、確かにその通りでした。すると「校長先生、カリフラワーにつぶつぶがあるよ。」と言うので、行ってみると……。葉っぱの所々に丸く小さな穴が開いていました。もしやと、よく見てみるとその穴の近くに、いました、いました、アオムシが……。そのつぶつぶの正体は、アオムシの糞だったのです。そのアオムシをどうするか、子どもたちと話し合いました。また、こんもりとしたクローバーを見ている子どもたちがいたので近寄ってみました。やさしく触りながら四つ葉をさがす仕草の何とかかわいらしいことか……。「朝の光を浴びて、光があたってきれい。濃い緑と光ってる薄い緑があるよ。」ですって。1年生の言葉です。花ボランティアの皆様のおかげで整えられた円形花壇の周りには、自分が育てたい花を選んで植えた、栽培委員会の子どもの植木鉢が並んでいます。観察することを通して考える力が身に付くことや、きれいなもの、育てたいものに心を動かし、仕草や言葉に表れる感性の育ちをうれしく思う朝でした。

さて11月26日から12月7日まで原小学校では人権週間です。また、12月は横浜市いじめ防止啓発月間になっていることから、26日(月)の朝会では人権、とりわけいじめについての話をしました。子どもたちに一つの新聞記事を紹介しました。私がどうしても捨てられない、忘れられない記事、それは2010年10月、群馬県桐生市で小6の女の子が自らの命を絶ったことを扱った、新聞記者の経験から絞り出された「一人の給食」という記事です。その記事の概要です。

その小6の女の子は、不快なあだ名で呼ばれ、給食時に仲間はずれにされ、一人で食べていた。記者は、何よりもつらかったのはひとりぼっちの給食だったろうと……。なぜならその記者自身がいじめられていた小3、4のときを思い出したからだという。当時のクラスの給食は(今では信じられないことだが)好きな子同士でグループをつくり、机を寄せ合って食べる方式。記者が「仲間に入れて」と聞くと「Aちゃんに聞いて」。Aに聞くと「Bちゃんに聞いて」。Bに聞くと「Cちゃんに聞いて」……。たらい回しにされた。記者はそれでも、めげずに聞き続けた。一人は絶対がいやだったから。小学生の時は、つらくて恥ずかしかった一人の食事が、大学生の時には全く苦にはならなくなっていた。だから大人には、そのつらさが想像しにくいのかもしれないが、一人でぽつんと食事することは、子どもにとって、言葉の暴力を受けるよりも、はるかに屈辱的である。小6の女子が命を絶つことを決断するほどの、耐えがたい苦痛だったに違いない。

この話を聞いて、子どもたちはどう感じたのでしょうか。私は、誰か、その子を救えなかったのかなあ、一人でも声をかけて。また、記者が小3、4の時の教師の無神経さはどうだろうと……。いじめを受けている子どもは、表面上は周囲に合わせて笑っていても、心では泣いていることがある。この記事のように自らの命を絶ってしまうことも……。いじめのポスターのメッセージにあるように、心の奥の悲しみに気付きたい。1000人の原小の子どもたちの中に、今、つらい思いをしている子どもがいたら、ぜひ相談してほしい、全力で守ります、そう伝えました。

人の力は大きいです。人を悲しませることも苦しませることもできるマイナスの力がある。また、人を助けることも笑顔にさせることもできるプラスの力もある。子どもたちには、人の力のプラスの力を使ってほしい。クラスや学年に、だれもが受け入れられている、安心できる温かい空気があるか、見つめてほしいと話しました。子ども一人ひとりが大切にされ、居場所のある原小学校に。いじめや差別がない、だれにとっても、居心地のよい原小学校に、みんなできていきたいと思います、私の話を閉じました。

保護者の皆様、地域の皆様、平成30年の本校の教育活動に様々な形でご協力やご支援をいただいたことに深く感謝しております。ありがとうございました。

来る平成31年も、お力添えをどうぞよろしくお願いいたします。